

## 「七一雑報」編集主人

### 村上俊吉という人

高 道 基

明治期のキリスト教ジャーナリズムにとって先駆的な役割を担った『七一雑報』に関する論策が目につき始めた（例えば同志社大学「キリスト教社会問題研究」三〇号記念特集所載の藤代泰三及び茂 義樹論文）。

『七一雑報』は一八七三年の「切支丹禁制」高札撤去の直後、一八七五年十二月、宣教師ギューリックの援助により神戸の雑報社から発行されたもので、もとよりゆかりの深い神戸女学院に美装のまま保存されてある。

かつて私はこの編集責任者村上俊吉に強い関心を抱かされたことがあるのでそのことに触れて稿をふさぎたい。

女学院の古い同窓生故三井たまの「こぼれ梅」（一九七八年一月、日本基督教団出版局）の中に、当時兵庫教会牧師であった村上俊吉についての回想的描写がでている。明治三十年ごろの風貌だろうか。少女の目にうつった彼は「羊のようなあごひげのある平和そのもののやさしい先生」だったという。私には『七一雑報』の編集方針がもった余りにもくだけた庶民性の謎がとけた思いがした。

その創刊号の論説はこんな調子で始まる。

「日本国中の男も女も、おしならしたるその中で、新聞紙やお触れ書などを差支えなく読む通例の字読みが、何程

ありましようか？（中略）それ故この新聞紙には、投書のはか成るだけ分りよく、平たい言葉で、先生方の高い話やら世の人のためになることを書き、いろは四十八文字さえ知っていれば、あとは読み手の考えにて解るように致します趣向ゆえ、向う裏の七兵衛さんでも、隣り町の八兵衛さんでも、お松さんでも、お竹さんでも、又へんぴの百姓衆でも、此の新聞を読んで開化の仲間入りをなさるるように、お頼み申します」。

こうした語り口は、まだ志士の氣風の抜けなかった当時の少壮指導者の断じて真似できるものではあるまい。

村上は小田原藩医村上貸庵の末子として出生（同じ小田原藩医の孫として生まれたのに北村透谷がある）。六歳で父を失ない、十五の時三田藩医村上恒庵の養子として迎えられる。多感の少年時代を幕末期もともと開明性に富んだ三田で送ったことはその後の彼の生涯に決定的な役割をはたすことになる。藩主九鬼の息の紹介で慶応義塾に学び福沢に私淑、卒業のち横浜丸善に勤めるのだが、この間知人から贈られたバニヤンの『天路歷程』*The Pilgrim's Progress* を読み回心の経験をもつ。（当時の翻訳事情を考えるならば、村上は原文又は漢訳で読んだのだろう。漢訳では「天路歷程」となっているから、村上の抄訳は漢訳によると推定されるが、この点はどうであろうか。御教示賜りたい。）

村上の回心事情は明治初期の青年たちの入信事情に較べて、かなり異質なものを感じるが、ともあれバニヤンの熟読は彼の基礎経験であり、彼の受洗につながってゆく。

村上はやがて神戸に出、栄町三丁目（現在の三井銀行近く）に設立された「志摩三」商会に入社、一八七五年五月、宣教師J・デイヴィスから受洗、この年、ギューリック宅を本拠として『七一雑報』を発行している（編集主人。印刷者今村謙吉 初号一二〇〇部）。

『七一雑報』の内容その他は別稿にゆずるが、村上は一八七六年木戸町に設立の「聖書講義所」主任となり、ここを母胎として設立した摂津第四公会（現兵庫教会。初代仮牧師アッキンソン）の伝道師に就任、翌年 Self-Support, Self-

Independent の教会を、<sup>アメリカン・ボード</sup>という米国伝道会の方針にのっとって按手をうけ、

受けたのは沢山保羅について二人目であることは余り知られていないようだ。

再び三井たまの回想に戻るのだが、村上牧師は目の不自由な母堂と共に、いつも温容をもって人に接し、神主だったたまの父をさえ敬服せしめた人柄であったという。

日本人として新島、沢山につぐ位置にありながら、村上は自らの位置を押し出すこともなく、平歩晴天、悲しむ者と共に生きた人というイメージが浮かんでくる。

ところで『七一雑報』であるが、一八八六年一月に『福音新報』と改称、発行所を大阪に移したのち、翌年六月廃刊している。この間の事情を調べているうち、女学院の図書館に『旭光』という新聞が保存してあることに気がついた。一八九五年の発刊だけれど、この編集責任者が村上俊吉となっていてびっくりした。『七一雑報』と同じ体裁で、『雑報』『論説』『投書』の三部からなるところも同じである。一九一六年の終刊（？）まで揃えられてあるから、神戸を中心としたキリスト教情況を調べるのに恰好な資料である。このことを伝え聞かれた明治学院の工藤英一教授に早速お訪ねいただいて嬉しかった。